『源氏物語』もうひとつの読み方

恋のかけひき

山口仲美
実践女子大学教授

恋のかけひき・

とつの読み方

実践女子大学教授
山口仲美

〈著者紹介〉
山口　仲美（やまぐち　なかみ）
1943年生まれ。東京大学大学院修了。文学博士。現在実践女子大学教授。
著書――
『平安文学の文体の研究』（1984年、明治書院）
『文章・文体　論集日本語研究』（編著、1979年、有精堂）
『命名の言語学――ネーミングの諸相――』（共著、1985年、東海大学出版会）
『生きていることば』（1987年、講談社）
『ちんちん千鳥のなく声は――日本人が聴いた鳥の声――』（1989年、大修館）

恋のかけひき

平成三年六月十日　初版発行　検印廃止

著者　山口仲美
発行者　村川修二郎
発行所　主婦と生活社
振替東京〇―三六三六四
印刷所　松濤印刷株式会社
製本所　株式会社若林製本工場

東京都中央区京橋三丁目五番七号　〒一〇四
TEL販売部（三五六三）五二二一（代）編集部（三五六三）五一三五（代）

© Nakami Yamaguchi, 1991 Printed in Japan
（落丁・乱丁本は，お取り替えいたします）
ISBN4-391-11351-1
本書の内容を小社に無断で複写複製することを禁じます。

恋のかけひき●目　次

プロローグ　7
人妻との恋――《光源氏と空蟬》　17
はかなき恋――《光源氏と夕顔》　30
秘められた恋――《光源氏と藤壺》　50
老女房の誘惑――《光源氏と源典侍》　68
妻と愛人――《光源氏と葵の上と六条御息所と》　88
幸福な結婚――《光源氏と紫の上(1)》　108

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

破綻した結婚――《光源氏と紫の上(2)》 125
夫婦喧嘩――《夕霧と雲居雁》 144
未亡人への恋――《夕霧と落葉の宮》 166
実らぬ恋――《薫と大君》 187
三角関係――《薫と匂宮と浮舟と》 212
エピローグ 234

装丁／松田　忠

恋のかけひき

的な『源氏物語』の魅力がひきだせるのではないかというのが、そもそもの私のねらいなのです。副題にある「『源氏物語』もうひとつの読み方」というのは、今までとひと味違って、「会話」から読む『源氏物語』ということです。

多様な恋のかたち、愛のかたちが、「会話」によってつむぎ出されていくところを、ぜひともこの本で明らかにしたいと思っているのです。

◉源氏物語、その展開

『源氏物語』は、登場人物が複雑でわからないとおっしゃる方に、この本は、そうしたものを知らなくても十分楽しめると断言いたしましょう。

なにしろ、この本の各章に登場するのは一人の男と一人の女だけなのですから。せいぜい多くても三角関係にある二人の女と一人の男、二人の男と一人の女といった三人どまりです。

とはいうものの、この本をよりいっそう楽しんでいただくためには、『源氏物語』の内容、登場人物、それから現代と違う結婚形態などについて、簡

プロローグ

◉男と女の会話

「恋のかけひき」などといって、いったい何を意図しているのかとお思いでしょうね。

私のもくろみは、『源氏物語』に登場する男と女が、恋や結婚の場で、どんな駆け引きのある会話を交わしているかを明らかにしたいということなのです。

『源氏物語』には、実にさまざまの恋愛や結婚生活が描かれており、そこで交わされる男と女の会話は、緊張した人間関係をつくりあげており、現代にも通じる普遍性を持っています。

「男と女の会話」に注目して、『源氏物語』を読む。すると、きわめて現代

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

単にふれておく必要がありましょう。

『源氏物語』の作者は、いうまでもなく、紫式部とよばれた女性。平安時代も中頃に書かれた長編小説です。世界最古の長編小説であり、日本人が誇り得る傑作中の傑作でもあります。

五十四巻から成っていますが、一巻が短いものですから、読み切れないなんてことはありません。内容は、ひと言でいえば、ラブ・ストーリー。むろん単なる恋愛物語ではなく、人生への深い洞察が込められています。

内容上、大きく三つの部分に分けられます。第一部は、巻一の『桐壺』から巻三十三の『藤裏葉』まで。第二部は、巻三十四の『若菜』から巻四十一の『幻』まで。第三部は、巻四十二の『匂宮』から最終の巻五十四の『夢浮橋』まで。

◉美男の愛の遍歴

第一部と第二部の主人公は、「光源氏」。美男で、身分が高く、経済力・政治力ともに抜群といった理想的な男性。これだけで十分女性の憧れの的にな

るのに、さらに女心をつかむのがこの上なくうまい。彼の発する言葉は、女の心にぴたっと添って、女を魅惑してしまいます。

第一部は、こうした光源氏の最盛期の話。彼の絢爛たる愛の遍歴が語られています。

当時は、一夫多妻制ですから、正式の妻の他に、何人の女性と契りを交わしてもかまわない。いずれも、愛人待遇にはなりますけれど。多彩な女性関係の許される時代だったのです。

正妻は、複数の女性の中で一番身分の高い人がなります。いくら男性に愛されても、身分が低ければ、正妻にはなりません。身分意識が非常に強いことも、現代と違っています。それから、正妻となるためには、きちんと親たちの認めた結婚をしていなければなりません。

「光源氏」の相手になった女性は、大勢います。この本では、次の七人の女性をとりあげました。人妻の「空蟬」、友人の愛人であった「夕顔」、父帝の后の「藤壺」、好色な老女官の「源典侍」、正妻の「葵の上」、前皇太子妃の「六条御息所」、準正妻の「紫の上」。

これらの女性たちは、人柄や環境に応じて、個性豊かな言葉を発し、光源氏とさまざまな関係をつくっていきます。たとえば、彼の甘い言葉に素直に魅せられ、それに応え、深い恋愛関係に陥っていく「夕顔」のような女性もいれば、自分の低い身分を考えて、彼に強くひかれつつも、彼の甘いささやきに乗らずに、理性的に身を処していく「空蟬」のような女性もいます。

あるいは、彼の言葉に、刺(とげ)のある言葉でしか対応できず、良い関係がつくれない「葵の上」や「六条御息所」のような女性もいます。

彼らの交わす言葉をたどっていくと、男と女の愛と会話のダイナミクスが見えてきます。

◉まじめ男の恋の行方

第二部は、同じく「光源氏」のおりなす人生ですが、第一部とうって変わって「光源氏」の中年以後の苦悩にみちた人生が展開しています。

ここでは、「光源氏」は、恋と結婚の敗北者。女との言葉のやりとりにも、人生の苦汁がにじみ出ています。光源氏と会話する女性として、この本

では「紫の上」をとりあげました。彼女は、光源氏に長年連れ添った最愛の女性ですが、ある出来事を境に、もろくも二人の関係が崩れていきます。その様相が、会話にリアルに描き出されています。

彼らは、いったいどんな言葉を交わし、人生の痛みに耐えていったのでしょうか。

また、この第二部には、光源氏の息子「夕霧」が登場します。「夕霧」は、美男ではありますが、父の光源氏と反対にすこぶる謹厳実直な男性です。おそらく母親の「葵の上」に似たのでしょう。女遊びひとつせずに、まじめ一筋に、正妻「雲居雁」を大切に守って、中年になりました。

そのまま老いれば問題はなかったのですが、中年になって、未亡人「落葉の宮」に一世一代の恋をしてしまいました。さあ、大変、それまで大事にされてきた「雲居雁」とは夫婦喧嘩をはじめるし、一方、思いを寄せた「落葉宮」も口説きおとせずに四苦八苦。口下手で、もてない男の会話の見本が、この第二部には見られます。

◉実らぬ恋を続ける男

第三部は、登場人物がそっくり入れかわり、光源氏の晩年の息子「薫（かおる）」が主人公になります。物語の舞台も、京都の宮中や市街地から、宇治の山里に移ります。

「薫」は、光源氏の子ということになっていますが、実は、光源氏の晩年の正妻「女三の宮（おんなさんみや）」と、「柏木（かしわぎ）」という若者との間にできた不義の子です。彼自身、小さい頃からそれを感じ、出生の秘密に悩み、仏道にひかれる変わった青年に成長しました。彼は、誠実で、女の気持ちを大切にし、自らの愛の心を押しつけがましく女に語ることはありません。

一方、この第三部には、「薫」と対照的な男性「匂宮」が登場します。彼は、光源氏の孫にあたりますが、情熱的で浮気っぽい男性です。「薫」と違って、愛の言葉を誇大に語り、激しく女にせまります。さすが光源氏の血をひく孫だけあって、口が達者。登場する女性たちは、宇治の山里に住む美しい三姉妹「大君（おおいぎみ）」「中君（なかのきみ）」「浮舟（うきふね）」です。

これら男女のおりなす喜びと悲しみと苦しみに満ちた恋の物語、これが第

三部の内容です。

この本では、永遠の愛を求めた「薫」と「大君」の会話、三角関係に陥った「薫」と「匂宮」と「浮舟」の会話をとりあげ、言葉によってつくられていく緊張した人間関係を明らかにしてみたいと思います。

以上が、この本でとりあげる登場人物たちですが、全部合わせても、わずか男性四人に女性十一人。複雑な系図など知らなくても、十分に理解できる内容です。『源氏物語』の、現代に生きる側面を強調したかったのです。

◉男を手引きする

最後に、現代と大きく違っている風俗・習慣についての若干の補足説明をします。すでに述べましたように、結婚形態は、現在の一夫一婦制ではなく、一夫多妻制。しかも、通い婚がふつうですから、夜になると男性が女性の家に通って行き、夜があけないうちに女性の家から帰って行くという形態です。

でも、正妻になると、男性が後に自宅にひきとって一緒に住むことが多い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.